

憩う学生たち (大学会館前)



第 22 号

発行・鴻文会

山口大学 文理学部 文学科
 人文学部 同窓会
 山口大学人文学部内
 電話 (083) 933-5200

(連絡事務所)
 山口市平井773-2
 沖田ビル202

電話・FAX (083) 928-4527
 郵便振替口座
 01500-4-15902

同窓会という彩り

鴻文会副会長 立川和正

同窓会、というものの出入りするようになって、改めて「大学」というものを見てみました。ひとくちに、大学といってもそのイメージは多様です。

同窓生が自分の出身大学のことを口にすると、その大学は、一般の人がいう「大学」とはイメージが異なっています。また、同じ大学の現役の学生が持つイメージともやはりちがいます。

いまや、全国の大学は、生き残りを賭けて、あるいは格付けを前にして、その方途を必死に模索しているといえます。それが現在の大学の偽らざる姿でありましょう。しかし同窓生としましては、そういういった一種生臭い問題をも含めて、広く文化現象としての「大学」を考えてみるのです。

「大学」は、未来群と現在群と過去群との三群で成り立っていると見ます。未来群とは現役の学生、現在群とは現役教職員つまり大学当局、過去群とは同窓生もろもろのことです。現実の大学当局を中心にして、未来志向の学生と過去回帰の卒業生がブリッジしているのが「大学」なのだと思えます。

学生は、例外なく卒業後の何かのために、つまり未来の自分のためにいま学生しているのです。キャンパスは四〜八年の期限付き未来群像の世界です。

教職員スタッフは、真理探究を標榜しながらもその大半はそれとはほど遠いような現実のなまの問題に追われているのが実情でしょう。けれど、現実にはそれで大学が動いているのです。

同窓生は、すでに生きる軸足を大学の外に置いています。

それだけに気楽な立場に居ることは否めません。同窓生に通底するのはまずノスタルジーです。それは少し甘くちよつぱりほろ苦くて……。同窓会には、古くなく「かつての未来群」が静止画像のように張り付いているのです。そこには、生きていくための駆け引きや緊張感からは距離を置いた一種のバーチャルな安らぎがあります。そこは限定的ではありますが、人間としての「善意」や「真意」が出しやすい場なのです。流行ことばでいえば、「癒し系」の一つともいえましょうか。頼りないようで結構しぶとく続いていく同窓会は、案外したたかな情のつながりを持っていると思えてなりません。

暫く振りに同窓会へ出たときの、あの何ともいえない面映さやモヤーとした安堵感はどこから来るのでしょうか。

鴻文会、というわが大学の同窓会に出てみて思いますが、それが魂の再生産の場になるといってほど大げさではない

にしても、それでもちよつとした人生の
箸休めにはなるということだ。そうい
うほんの些細ともいえることが、実は生

きていく彩りをかかなり鮮やかなものにす
るのではないでしょう。

(文理第八回卒・西洋哲学)

山口大学教育研究財団について

鴻文会長 大野光生

ご存知のように、山口大学同窓会連合
会が発足いたしましたのは、文部科学省
の方針としては、全国にある既存の大学
を整理して、研究機関としての役割を十
分にはたしていただけないと思える大学を廃校
にするという方向で諮問機関へ答申を依
頼するという動きに対応し、母校の存続
をバックアップするためでした。財団設
立の動きが始まって、各学部同窓会には
かり、財団法人山口大学教育研究後援財
団発足に向けて募金活動を始めました。

その目的は、山口大学における教育・研
究活動・国際交流並びに学生の奨学等に
必要な援助を行い、もって我が国の教育、
学術、文化の発展に寄与する、というも
のです。目標額は、三億円でしたが、平
成十四年八月一日現在、総額二億一千五
百万円となりました。ご協力を感謝いた
します。目標額にはまだ届きませんが、
現在のところ、これを資産とし、その中
から一億五千万円を基本財産とし、運用
財産六千五百万円をもって文部科学省高等
教育局へ答申し、認可されました。

例えば、平成八年に発足しました山口

大学同窓会連合会の役割の一つを担うこ
とができましたのも、各学部同窓会の会
員のみなさんご協力によるものです。

ここで、その事業計画の一端をお示し
いたします。

まず、「教育・研究活動に対する助成」
これが四百五十万円。内訳としては、教
員の研究プロジェクトに対するもの。さ
らに、学術講演会、シンポジウム等の開
催経費の助成。次に「教育・研究の国際
交流に助成」として五百二十万円。これ
は教員の海外研修等に対する助成や外国
人研究者の受け入れ等に対する助成ある
いは国際会議等の開催に対する助成とな
ります。さらに、「研究成果等の刊行及
び助成」ですが、これは三年目以降に実
施することになります。最後に「学生の
奨学及び就職活動等に対する助成」とし
て五百三十万円。これは学生の独創的プ
ロジェクトにたいする助成や学生の国際
会議出席及び海外フィールドワークへの
助成、留学生交流事業への助成、就職活
動、特に就職先の開拓、調査、広報活動
等への助成ということになっております。

平成八年九月。山口大学創立五十周年
記念募金委員会が設置され、有馬前会長
が連合会の会長として同年十一月より募
金活動が始まりました。そして、平成十
一年一月に山口大学同窓会連合会が発足

いたしました。同年四月に記念式典が行
われ、さらに募金活動が続けられ、平成
十三年八月に財団設立に向けて文部科学
省との事前相談が開始されました。

(文理第四回卒・中国哲学)

賛助会員の制度にご協力ください。

鴻文会の活動に当てられる資金は、そ
のほとんどが毎年度の新入生会員の終身
会費に依存しているという状況です。名
簿の管理、会報の発行、ホームページの
書き替えなどの活動の充実と改善に加え
て、いよいよ本年度から、山口大学後援
財団の設立に伴い、財団が特定公益増進
財団として認められて寄付者への免税措
置が適用されるまでの間(通常設立後の

三年)、各同窓会も会員数に応じて財団
の運用資金への支援をすることになりま
した。最低三年間は、鴻文会にも毎年十
四万円の寄付が求められています。会員
の皆様にご厚志にお頼りしなければなり
ません。同封の振替用紙により、一口千
円(なるべく一口以上)のご寄付をお
願い申し上げます。

役員会よりのお知らせとお願い

鴻文会のホームページの開設！

鴻文会のホームページを新たに開設いたしました。会の紹介と活動内容、新着
情報などをお知らせいたしております。少しずつ更新してまいりたいと思えます。
掲示板を通して会員と鴻文会とのつながりを緊密なものにしていければよいがと
思っております。

ホームページアドレスは <http://homepages3.nifty.com/koubun/> です。

■ 会 員 名 簿 利 用 規 則 ■

1. 会員名簿の更新（新規入会・異動に伴う）と保管は事務局で行う。
2. 会員名簿は会員に限り開示することを原則とする。
3. 会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を目的とした利用に限り使用することができる。営利を目的とした利用は禁止する。
4. 会員名簿の開示は、直接に事務局で求めるか、郵便またはファックスで申し込み、事務局は、申し込み者が会員であることを確認して会員名簿を送付する。これにかかる経費は利用者が負担する。
5. 会員名簿の開示申請者名簿（利用者名簿）を作成し事務局で保管する。

※ 会員住所等の確認を毎年行いたいと存じます。ある意味では四年一度の名簿発行のスタイルより、住所管理に関してはより正確な管理が可能になる面もございます。本会報「鴻文22号」に同封しておりますハガキを使って、所定の項目にご記入の上ご投函ください。

.....

前号の「鴻文第21号」で報告しました平成13年度予算の〈特別会計〉で記載に誤りがありました。実害はありませんでしたが、鴻文会の皆様には大変ご迷惑をお掛けして誠に申し訳ございませんでした。訂正してお詫び申し上げます。(学内幹事)

(誤)

科 目	13年度財産	12年度財産	比較増減	摘 要
定 額 預 金 (H . 3 年)	1,000,000	1,000,000	0	H.13年満期
中 期 国 債 フ ァ ン ド (H . 1 0 年 ・ H . 1 1 年)	1,409,153	1,403,407	5,746	
定 額 預 金 (H . 1 2 年)	1,409,000	1,409,000	0	
定 額 預 金 (H . 1 3 年)	400,000	0	400,000	H.12年度一般会計積立金から繰入 (60万円)、20万円はH.13年度一般会計へ
合 計	4,218,153	3,812,407	405,746	

(正)

科 目	13年度財産	12年度財産	比較増減	摘 要
定 額 預 金 (H . 3 年)	1,000,000	1,000,000	0	H.13年7月満期 (利息20万円を13年度一般会計へ繰入予定)
中 期 国 債 フ ァ ン ド (H . 1 0 年 ・ H . 1 1 年)	1,409,153	1,409,153	0	
定 額 預 金 (H . 1 2 年)	1,409,000	1,409,000	0	
合 計	3,818,153	3,818,153	0	

平成13年度事業報告

1. 第27回役員会 (6月23日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (7月5日)
3. 鴻文会総会 (8月12日)
4. 第1回事業運営委員会 (10月12日)
5. 第28回役員会・第2回事業運営委員会 (11月22日)
6. 山口大学同窓会連合会理事会 (12月12日)
7. 会報「鴻文」第21号発行 (2月1日)
8. その他

平成13年度決算

収入総額 3,124,268円 支出総額 2,748,312円 残高(次年度繰越金) 375,956円

<収入の部>

科 目	当初予算額	決 算 額	比 較 増 減	摘 要
繰 越 金	321,722	321,722	0	
会 費 収 入	2,020,000	1,940,000	△80,000	10,000円×194人
名 簿 収 入	4,000	0	△4,000	
繰 入 金	200,000	691,893	491,893	総会費の一部として特別会計から
雑 収 入	160,000	170,653	10,653	連合同窓会家賃 130,000円 預金利子、その他
合 計	2,705,722	3,124,268	418,546	

<支出の部>

科 目	当初予算額	決 算 額	比 較 増 減	摘 要
会 議 費	150,000	89,932	△60,068	役員会、その他
印 刷 費	250,000	271,990	21,990	会報印刷 4,700部、封筒印刷 9,000枚
郵 送 費	400,000	611,230	211,230	会報郵送料、葉書購入、通信連絡費
事 務 所 運 営 費	800,000	792,250	△7,750	家賃 390,000円 (32,500円×12)、人件費 262,250円、事務所経費 40,000円 (電話、町 内会費)
事 務 費	100,000	86,096	△13,904	消耗品、その他
寄 付 金 費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
慶 弔 費	40,000	0	△40,000	
積 立 金	0	0	0	
総 会 費	700,000	721,950	21,950	
予 備 費	165,722	74,864	△90,858	交通費、懇親会費、その他
合 計	2,705,722	2,748,312	42,590	

<特別会計>

科 目	12年度財産	13年度財産	比 較 増 減	摘 要
中期国債ファンド (H.10年・H.11年)	1,409,153	1,411,540	2,387	H.14年3月29日現在
定額預金(H.3年)	1,000,000	0	△1,000,000	満期解約
定額預金(H.12年)	1,409,000	1,409,000	0	
定額預金(H.13年)		1,000,000	1,000,000	定額預金 (H.13年100万円) 満期預け替え 満期額 1,691,893円 (691,893円は13年度一般会計へ)
定額預金(H.13年賛助金)	0	288,000	288,000	H.14年3月28日現在 (72名)
合 計	3,818,153	4,108,540	290,387	

平成14年度事業計画

1. 山口大学教育研究後援財団発起人会 (4月23日・5月10日)
2. 第29回役員会 (6月8日)
3. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (7月4日)
4. 会報「鴻文」第22号発行 (2月1日)
5. 山口大学同窓会連合会
6. その他

平成14年度予算

<収入の部>

科 目	14年度予算額	13年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	375,956	321,722	54,234	
会費収入	2,000,000	2,020,000	△20,000	10,000円×200人(14年度入学者数)
名簿収入	0	4,000	△4,000	
繰入金	0	200,000	△200,000	
雑収入	130,000	160,000	△30,000	後援財団家賃130,000円
合 計	2,505,956	2,705,722	△199,766	

<支出の部>

科 目	14年度予算額	13年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000	150,000	△50,000	役員会、その他
印刷費	250,000	250,000	0	会報印刷(4,800部)
郵送費	400,000	400,000	0	葉書購入、会報郵送費、通信連絡費
事務所運営費	900,000	800,000	100,000	家賃、人件費、ホームページ等維持費 事務所経費(電話、水道、町内会費)
事務費	100,000	100,000	0	会報発送などアルバイト謝金、消耗品、その他
寄付金	250,000	100,000	150,000	日中学術交流奨励金、後援財団
慶弔費	40,000	40,000	0	
積立金	300,000	0	300,000	
総会費	0	700,000	△700,000	
予備費	165,956	165,722	234	
合 計	2,505,956	2,705,722	△199,766	

<特別会計>

科 目	14年度財産	13年度財産	比較増減	摘 要
中期国債ファンド (H.10年・H.11年)	1,411,540	1,411,540	0	
定額預金(H.12年)	1,409,000	1,409,000	0	
定額預金(H.13年)	1,000,000	1,000,000	0	
定額預金(H.13年)	288,000	288,000	0	賛助金
定額預金(H.14年)	300,000		300,000	一般会計から繰入
合 計	4,408,540	4,108,540	300,000	

研究室 同期会

同窓会

文理学部国文科同窓会

添田 建治郎

国文科同窓会は、長府町の功山寺に下関市丸山町の「下商会館ふく旅庵」と、下関地方での開催が二年間続きました。が、昨年度は久しぶりに山口に戻って開催いたしました。三月二日(土)、会場は山口大学前の食堂「進」。総会では小田稜亮会長の挨拶のあと、議事に入り、会計報告を了承。引き続き懇親会に移りました。出席者は十名を少し超えるほどの少人数でしたが、水本精一郎、関一雄の両先生、それに、日本語文化論コース(国文の現在の呼称)に新たに着任なさった、尾崎千佳(近世文学)、森野正弘の両先生もお迎えしての「盛会」となりました。後河原の青春時代のこと、研究室の今のこと、これからの大学のこと。お若い先生方のご出席で、例年以上の盛り上がりです。散会のと、湯田駅前のお茶店での二次会では時の過ぎるのも忘れて、また、それぞれの今に戻っていきま

(国文学・文理第十七回卒)

投稿

「創作」 松籟

大野 光生

(文理第四回卒・中国哲学)

南側一帯が海に面している山口県吉敷郡阿知須町だが、同じ阿知須町でも、引野というところは、海からいけば遠い内陸にある。

昨年夏、さらら博覧会のメイン会場となったさららドームの西側のあたりから海へ注ぐ井関川というさほど大きくはない川に沿って、奥地へとおよそ四キロばかり行くと、途中は海拔二、三米の水田が続く。おそらく往時は海だったのではあるまいか。水田地帯もやがてナマコが横たわったような、そう高くない丘に遮られる。そこから宇部市西岐波区片倉へ通じる道と阿知須でも最後の集落青畑に至る小道とに別れる。その辺一帯が引野というところなのだが、人家はまばらである。

十一月初旬のある日、私は青畑へ通じる小道をいよいよ井関川が瘦せ細った小川に沿って紅葉の山路を歩いた。分岐点から三キロほどのところに標高九十六米あるかないかの丘の頂きへ至るもう一つの分岐点に至る。そこからさらに左へと

頂きは六畳岩という地名だが、文字通り広さ六畳ほどの平べったい花崗岩が露出して、そこからの眺めが格別なので、時折、気休めにハイキングするのだった。その日も快晴の秋日和だった。私は岩の上にたどりつくと、汗ばんだ衣服を脱ぎ捨て、おのが肉体を秋の日に晒す快感に浸った。突然、原人になりたいという衝動が湧いたらしい。ほとんどこの場所について、知る人はいないのに、踏み固めたなだらかな樹林の道が続いている。さほど急勾配でもないのに、老齢の私にも負担はない。汗を出すことがこのところ

なかつたので気持ちよかつた。裸の体に当る風もさわやかであつた。ああ、よい思いに浸ることが出来たと、しばらくは体に衣服を着けるのが惜しまれるような気分であつた。ターザンの発するような雄叫びが発したかつた。

ここからの眺望は、ほぼ二百四〇度の視界で、北は荒滝山、鷹の子といったやまなみ、東は陶が岳、南は遠く野島、佐波島、竹島、さらに目を遠くにやれば姫島や国東半島も眼下に収めることができ。しばらく眺望を満喫したあと、汗の乾いた衣服をまとい直し、もと来た道を下って行つた。

分岐点から再び引野の集落までもどつてから、そこにある寺の前から反対側の小高いところへ続く鬼道のそばに、小さな立て札があるのを見付けた。私は、こんなところにこんなものがあるとはついぞ知らなかつた。まだ余力もあつたので、折角だからと、矢印に従って登ることにした。すると、鎖で囲われた若松が一本風に揺れ、かすかな松籟を響かせていた。

これが案内標識に示されたお姫様松なのか。そう思つて、由来書きを読むと、足下の寺が明栄寺という名前前で、毛利輝元の養女古満姫という人の死に因んで植えられたものだということがわかつた。

戦国の武将毛利元就の孫であり、関が原の合戦の西軍の総大将であつた毛利輝元とのかかりあいがあるというだけで、なんだか、その松が特別なものに見えた。が、それよりもっと私の好奇心を促した石碑がその傍にあるのを発見した。

畳半畳ほどもない御影石の石碑だつた。私は吸い込まれるようにその文面を見入つた。

以下の文章は、ここから私の家への帰途、ゆつくりと歩きながら抱いた想念と思索したことを文に綴つたものである。勿論、思索と想念の源泉は、石碑の文面によるものだつたのだが……。

いざ、執刀となると、愛吉の意志に逆らう何が心が生じた。目前にあるのは、自分を産んでくれた実の母親の屍であることは、まぎれもない事実なのだ。この地に嫁いできた母にすれば、夫婦としての時間あまりに儂いものだった。三十三歳にして夫と死別してからは、女手一つで兄超造と自分とを育てあげてくれた。医学のためとは言え、生みの親の体を切り刻むことにいささかの逡巡がくせなかつた。母の亡骸の前で、愛吉のメスを握つた右手が震えている。

臨終の二日前、初音は再起不能と自ら判断し、息子の愛吉に向かつてときれがちな声で言つた。

「息をひきとつたら、ワシの体を解剖して、病気のもとをしらべるんだよ。私のほかに病気で苦しんでいる人もいよう。その人達のために役立つことがきつとある。」

医師として、愛吉にとつて、なによりなまげなく思うことは、自分をこの世に生み出してくれた母の病気の原因が最後まで診断するに至らなかつたことだつた。

愛吉が生まれた時、母初音は三十歳だつた。十二歳の時、長兄である超造は、父の跡を継いで医師となるところだったが、家督をその兄から譲りうけた。超造は新しい時代を生きる意気に燃えて上京してしまつた。兄がそばにいてくれたら、この事態をどううけとめ、どのような助言をしてくれたであろうか。不惑の年齢とはいえ、今までこのような孤独に苛まれたことは、ついでなかつた。

「母上」
愛吉は、白布をとり、すでに息絶えて蒼白となつた母の顔をしばらく凝視していた。

「なにをそんなに怖がつている。」
もの言わぬはずの亡骸がつぶやいていように思える。初音がいつも苦しみなから当っていた指先は、胸部の下のあたりだつた。胃袋ではない。肝臓か。それがどう作用しているのか。

「癩かもしれん。癩に勝てんとなりや、お前が加勢するのが医者としてのつとめだよ。なあ愛吉」気丈な母だが、医師として育て上げた息子にまかせてきた。
兄から家督を譲られた愛吉は、苦学し

て医学の勉強をし、幼くして死別した父文道の歩いた道を行くことになつた。愛吉の課題は、村内のトラホーム患者を撲滅することだつた。そしてそれを実践してきた。その実績があることを喜びとして、井関小学校の校医もつとめていた。

母の発病は予想外のことだつた。
(当時、肝臓癌という呼称はなかつた。病気の名前を漢方にたよつて、癩というのが、今で言う癌のことだつた)

初音は享年七十二歳。明治元年三月生まれの愛吉は四十一歳と一ヶ月。医師としてもつとも油のつた年齢だ。それだけに、初音を天命に逆らつた死に方をさせたことがやりきれなかつた。

初音は十六歳にして、美祿郡綾木村の医師堀家の娘として、吉敷郡井関村木床の医師脇文道のところへ嫁いできた。文道が若くして二人の息子を残して他界。超造に続いて生を享けたのが明治元年三月五日のことだつた。

母の初音は若くして後家となり、ふたりの息子の養育には、里の手助けもあつて、虫下し薬サントニンを売って細々と暮らしてきた。同じ吉敷郡内出身の医師で、維新に身を投じた大村益次郎がいる。さらに聞けば、阿武郡地福からは、津和野藩の典医森家へ養子として婿入りした森静雄もいる。初音は医師の家に生まれたので、当然、それらの人達の活躍を知り、息子たちの未来に期待していた。父文道が医師としてこの地にあつて、大村や森の動静を風の便りで知れたことは当然のことだつた。

愛吉より六歳年上の林太郎が賢母とい

われた母峰子の導きで、年齢を偽つてまで大学予備門へ入つたことは知らずとも、新しい時代の到来に對していかに対処すべきか、俊敏に反応した。いつの時代も賢母なれば、いかに自分に才能が備わつていても、女ゆえに烈女の身とはなれ、出世するのは男にきまつていたからでもあつた。

初音は、当然生まれてくる子が男であれば、運命として医師の道を歩むことになるのを弁えていた。ならば、益次郎や森林太郎などと同様、新時代を担う力量を愛吉に期待したことは、うまでもない。しかし、初音の思いとは裏腹に、愛吉は、苦学して医師となつてからは、村のトラホーム患者とひたすら向き合う日々が始まつた。愛吉は三十六歳で村会議員も兼ね、翌年井関小学校の校医となると、村にトラホーム患者の多いことを憂い、無報酬で検診治療に携つてきた。

重症患者三十名を自宅で看病する有様だつた。五年間の奮闘の末、明治四十二年に二百十名だつた患者が大正二年には五十名に激減していた。五年間の患者総数五百六十名その治療費三百十六円は愛吉の自費だつたという記録が阿知須町史に残されている。

新時代を迎えた明治にあつて、初音の意識は、連れ合ひの文道の死によつて、いよいよ高揚するばかりだつた。母なればこそであろう。生まれ落ちた子が男だと知つた時、文道の話の思い出し。それは、刑死した罪人の屍をもらい受け、オランダ語の原書「ターヘルアナトミア」にならつて腑分けした杉田玄白、前野良

沢のことだつた。

あれは日本初の画期的業績だつた。それによつて、紅毛人の内臓と日本人のそれとが同じだということを確認できたのだ。

初音は、早くから、脇家四代目となる医師であり実の子である愛吉に對して研究の大切さについて促すことを忘れなかつた。

幕末、萩の地で日本初の女性を解剖した記録も知つていた。ターヘルアナトミアを手本として刑死した犯罪者の死体をもらつて腑分けしたのは、内臓のひとつひとつを確かめることが目的だつた。自分の体のどこに、どんな病魔が附着しているのか、息子の愛吉がそれらをどのように見届けるか、初音の情熱をかきたてたのだつた。

天保六年生まれの初音は、愛吉の生まれた明治元年まで、激動する幕末維新の時代を知らなければならなかつた。元治元年、長州藩の犯した禁門の変以後、矢継ぎ早にやってくる時代の荒波を、幼いながら見つめてきた。中でも記憶に新しいことは、村の医師であつた父が、隣村の大田村八幡宮の社殿に駆けつけた時のことだつた。

当時、そこが高杉晋作率いる奇兵隊の屯所だつた。長府の功山寺で決起した高杉軍は、小月、厚保を経て、伊佐で一泊。さらに東進して、初音の里、美祿郡綾木村に到着、そこから北上し、隣村である大田に屯所を構えた。一方萩からは藩の軍が明木村を経て絵堂村大木津までやってきている。互いに長登峠を前にして対

時していた。掠梨藤太率いる秋の藩軍は、いわば主君毛利慶親を抱く正規軍だ。だから高杉の率いる奇兵隊は、その時点では反乱軍なのだった。

ここが歴史の転換点となるなど、初音の父の判断するところではなかった。戦いが始まれば、敵味方の区別なく傷病兵の手当をしなければならぬのが医師としての勤めだった。三田尻、小郡を経て、長田村からは井上聞多の率いる兵が高杉軍と合流、大田の集落は賑やかとなった。

初音は、幼いながら、その時、初めて父の姿から激動する時代を見た。一八三八年生まれの初音が文道のところへ嫁ぐのが、その十六年後のことだから、吉田松陰の刑死する五年前のことになる。その後、維新へ経て、日本は日清、日露の戦いに勝利し、富国強兵、殖産興業という国是のもとに躍進の道を歩き始めていた。世界の大国である中国とロシアに勝つことができた。このエネルギーを国勢へと発展させる。

初音の思いは、そんな国情に対して冷めた視線を向けていた。それは女性だけが目指すことのできる視線だった。人間としての意識が高まれば高まるほど、自分が女性として生まれた運命と抗う情熱が燃え上がるのだった。初音の生まれた美祿郡綾木村からは、日本の地質学の貴重な資料となった才が峠断層のある長田村を経て、さらに二本木峠を越えて吉敷郡小郡へと続く。その距離十二キロ。そこからさらに二十キロの道のりを馬車に揺られて阿知須村引野の脇家とやってきた。

揺れ動く馬車の中で、初音は思う。結婚すれば当然生まれるであろう子たちについての未来像だった。柳井田で右折。小郡の町を過ぎると道を西へと進み、阿知須村の井関河畔で馬車を止めると、ほのかに潮の香りがした。

初音は生まれて初めて見る瀬戸内海の風景に、未来の自分を思い描く。自分は女だから、医師にはなれない。ならば、産み出す子を医学の道へと導かねばならない、と。

それから四十年、息絶える二日前、初音は改めて愛吉の行く末を思った。薬売りをしながら育てた息子の医師としての未来が、初音の脳裏に、まるで無限のひろがりのある宇宙のように思え。毎日、掃宅しては、小学生のトラホームが何人完治したと喜んで息子の誠実な態度に、この子には、未来がひらけている。そう信じた。かくて初音が献体の決断をしたのが臨終二日前のことだった。

吉敷郡阿知須町引野の明栄寺の向かいの丘には、花崗岩によって造られた石碑が残されている。碑文に言う。

初音堀氏十六歳嫁於文道明治四十一年四月念六日病没享年七十先死数日自知不能復起遺言解剖屍體以為病源研究之資長逝之翌日子敬奉教實此桜樹之下也嗚呼慈母生於医家嫁於医士而死後盡於医道豈唯為脇家中興之慈母而已哉樹下招魂々來花開花耶魂耶芳容髣髴使子孫永浴恩露銘肝何堪

明治四十二年四月二十七日
嗣子脇愛吉泣血拜識

そばに建てられた阿知須町教育委員会の案内板には、次のように記され、碑文の訓読も紹介している。

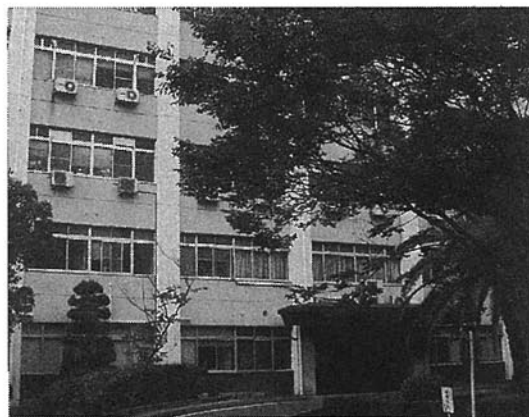
脇愛吉母(初音)解剖記念碑

脇愛吉は明治元年(一八六八)三月五日阿知須町木床脇文道の次男として生まれた。脇家は医家の家系で、愛吉も医師となって地域治療に貢献した。また村会議員、井関尋常小学校の校医もつとめた。後に京都市へ転出、同地で開業した。昭和二十九年十月十九日八十六歳で死去した。遺骨は京都より持ち帰られ、母の墓の傍らに葬られた。明治四十一年死去した母初音の遺言によって、母の死体を解剖し、その記念碑を建立した。当時としては、一診療所の中で病理解剖を行うことは稀なことで、その碑には次のような碑文がある。

初音は堀氏の出で十六歳のとき脇文道に入嫁、明治四十一年癌性肝臓炎様疾患に罹患死亡。行年七十歳。死に先立つ数日、自ら再起不能を知り、遺言して我が死体を解剖し病理発見の研究資料に供せよと。長逝の翌日これを実行せり。嗚呼、慈母は医家に生まれ医家に嫁し死後も亦医学に貢献す。豈それ脇家中興の人、慈母のみならずや。老樹は魂を招き魂来れば花開く。ああ花や魂や芳容は彷彿として来り、子孫をして永く恩露に浴せしむ。

実に肝に銘じて感激に堪えない。
明治四十二年四月廿七日

嗣子脇愛吉
泣血拜識
(了)



近藤喬一先生退官記念論文集
『山口大学考古論集』
の発売ご案内
申込先・近藤喬一先生退官記念事業
会(郵便振替01320-7-71722)
頒 価・六千円+荷造送料七百円
|| 計六千七百円

◎新任教官

昨年度十月に、森野正弘講師を、今年度四月に、馬彪教授、藤川哲講師を、十月にアラム・デュマリ助教をお迎えました。

夢三話

森野正弘

(比較言語文化講座講師)

昨年度十月、人文学部の比較言語文化講座に講師として着任しました。専門は国文学で、源氏物語を主たる研究対象としています。出身は東京で、国学院大学大学院を修了後、いくつかの非常勤講師をしながら国文学というディシプリンの

危機的状況について再認識し、いまだ漠然としていた将来に対する不安が実はほぼ絶望という域に達していたのだと了解しかけた矢先に、突然こちらへの採用が決まりました。それまで山口には縁もゆかりも無かったものから、ありきたりな表現ですが、まるで夢を見ているようでした。

源氏物語を研究している者にとつて山口というのは聖地の一つでもあります。現在刊行されている『源氏物語』のテキストの多くは「大島本」と通称される本文を底本としているのですが、これは室町期に山口を本拠地としていた大内政弘が飛鳥井雅康に書写を依頼して出来たものです。この本はやがて大内氏から吉見正頼の手に渡り、途中どのようなルート

を辿ったのかは不明ですが、昭和五年に突然佐渡で発見されることになりました。まるで夢のような話ではありませんか。その後、現代の源氏学者はこの十五世紀後半に山口で架蔵されていた源氏物語の写本を善本として認定し、読み継ぐことに決めたのです。

夢見心地で聖地にやってきた私は市内の中央という町に部屋を借りました。古老の話によれば、山口と湯田の真ん中にあるから中央なのだそうで、フレームを拡大することによって周縁であることが隠蔽されています。大学へ行くには、旧国道、JRの線路、榎野川といった具合に越境を繰り返さなければなりません。豊年橋の行く手には、東武動物公園の「レジーナ」を彷彿させる姫山が控えていて、そこが異界への入り口であることを物語っています。迷路のような水田地帯を抜けてゆくと突然キャンパスが出現し、眩暈から覚醒するかのような感覚に襲われます。私の研究室は研究一号館にあります。普通段学生に研究一号館と言っても、二号館が無いためにそれが何処にあるかは判らないようになっていきます。一応の目印は、ここが四年というスパンで死と再生を繰り返す時空であることをカムフラージュするために建てられ

たとしか思えない時計台です。時計台の背後には三本の大木が聳えています。これも直線的な時間を装うためのオブジェに他ありません。この館は外部との回路であるバス停に最も近く、他学部の研究室や実験室、悩める学生のための相談室などが混在するマジカルな領域と化しています。そんな名づけ得ぬ世界の住人となって一年が経ちましたが、まだ玉手箱を渡されずに済んでいます。

日本で一粒の
麦になりたい

馬彪

(歴史文化講座教授)

幼年期は「社会主義の大躍進」の年代であった。高等小学から高校卒業に至るまでの期間は「文化大革命」の時代を過ごす。高校卒業と同時に二年間の農村での労働、いわゆる下放を経験、二十代の半ばになって夢かない大学へ進学(当時はこれが一般的なことだった)。学部は幼少時親しんだ『三国志演義』や「文化大革命」当時、孔子批判のために学習した歴史学への興味もあって歴史学部を選択した。八十年代の中国は「文革」が収束し「思想解放」の時代を迎えていた。大学生として私の興味は古典文献、現代作品にも及びひきつづき大学院へ進学、修士号を取得後北京師範大学歴史学部で教鞭を執りつつ博士課程に入って(中国では在職博士生という)、著名な歴史学

者何茲全教授の指導のもと博士号を得ることができた。今翻って見るにこうした紆余曲折の時代を体験できたことは歴史学を志す私にとっては貴重な財産を得たと思っっている。

北京師範大学歴史学部の講壇に立つてから、一年生の基礎科目である「中国古史」(上古・明清)も、高年生の「中国思想史」「秦漢史」も、共通教育の「中国伝統思潮及び学派の概説」という授業も来日するまでの約八年間担当した。其の間、教育の功績を顕彰され北京師範大学青年講師第一回講義競技一等賞を受賞、「北京師範大学優秀教学成績賞」を授与された。一人の教師として、これは私の誇りと財産である。

七年前来日以来、私は東西の最高学府である東京大学と京都大学で研究生生活を続ける幸運に恵まれた。これはひとえに高名な中国史学者尾形勇博士の厚情によるもので、招聘外国人研究員として東京大学文学部東洋史研究室に席を与えられ、三年間研究に専念できた。当時、尾形博士は東大文学部東洋史第一講座教授であり、その上日本秦漢史学会会長を務められ、非常にご多忙であったにもかかわらず、私のために貴重な時間を割いて親身のご指導をいただいた。東大での三年間は何物にも代え難い充実した日々であった。それ故私は日本における中国史研究についての状況を綿密に調査、把握し、「内藤湖南と清朝の学術」という研究課題を選定することができた。一九九八年三月尾形先生が定年退官されたので、私も京都大学名誉教授谷川道雄先生

の元に移り、課題とした「内藤湖南」の研究に取り組むことになった。当初の一年間は月に一度京都に足を運び、谷川先生に個人指導を受け、「内藤湖南」研究会に出席するといったあわただしさだったが、ご指導によって私は内藤湖南の「支那上古史」「支那中古の文化」「支那近世史」「支那史学史」の研究に没頭した。私は次第に「内藤史学」の透徹した史論に傾倒し、中国史を日本において研究する意義の重さを確かに感じとることができた。

一九九九年四月から秦漢史の専門家富谷至教授に招かれ、京都大学人文科学研究所で招聘外国人学者として研究を続けている。「人文研」という素晴らしい環境の中で富谷教授の「漢簡研究班」に参加し、「尹湾漢簡」「神鳥傳(賦)」考辨」と「前漢における南陽豪族の考察」という論文と「秦漢豪族社会研究」という本を書いて終った。

「内藤史学」の研究のためには「京都学派」の問題を避けては通れない。「紹介書生 谷川道雄」と「超越戦後日本中国史学模式的谷川史学」では、「谷川史学」が今日如何に「京都学派」を發展させるかという視点から、「谷川史学」は戦後の中国史学に対したくさんの卓越した創見であったと考える。また谷川教授の著述「中国中世社会と共同体」の翻訳して終った。

ともあれ私は来日以来、直接指導を受けた先生をはじめとして多くの日本の友人たちの精神的、物質的な支えを受けて日本での生活基盤を築くことができた。

昨年四月一日から山口大学文学部に奉職した。これからは日本の恩に報いるのが私の使命と思っている。学生にたいして、私の座右の銘は三国志の雄、孫権の言葉「貴其所長、忘其所短。」(長所を貴び、短所を忘れる。)である。そして無償の愛に生きるこそこそ教職者の当為の務めであり、誇りであると思っている。愛には国境がない。愛とは厳格と情熱である。自分自身に厳格でなければならぬ。私はまず教師として自らを律することから始めよう。学生には情熱をもって接しよう。日中友好という大袈裟な旗印を掲げなくとも、日常の些細なことからもそれは可能なことである。私は日本で一粒の麦になりたい。

着任して

藤川 哲
(社会情報学講座講師)

今年度四月から山口大学文学部に美術史の講師として迎えて頂きました。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。着任して、「これで、今まで積読状態だった本を読む時間が手に入った」と思いました。前職は美術館の学芸員で、さまざまな刺激を受け、それに伴って購入した本も増えて行きましたが、読む方の時間は思うようには取れませんでした。また今回の引越して、本をあらためて並べ直し、その背表紙を眺めてみましたが、関心の対象がまばらで、収集が中途半端

であることがよくわかりました。これから、講義を行う、論文を書く、という明確な目的意識のもと、体系的に集め直したいと思っています。

男性用の小便器を芸術作品として美術館の展示に加えさせることに成功したマルセル・デュシャンや、一九七〇年代後半から見られる具象絵画復活の動向(ニユー・ペインティング)に、学生の頃関心を寄せたのは、今現在の美術を考えると上で有効な、自分なりの見取り図を手に入れるためでした。この現在の美術への注視は、一九九三年以来、ヴェネツィア・ビエンナーレやドクメンタなどの国際美術展に継続的に出掛け、実際に作品を見る、という形で今も続いています。前職までは関東圏に住んでいましたので、画廊巡りや現代美術の企画展へもために足を運び、展覧会やレビューを書いてもいました。山口へ来て、そうした新人発掘の現場に即応するような活動から、少し距離が出来てしまいましたが、

秋吉台の国際芸術村や市の情報芸術センター、県立美術館、美学の奥津教授が代表をされているNPO法人YICA(山口現代芸術研究所)の活動など、山口にも多様な豊かな現場があり、気持ちを新たにしています。

講義では、自分で見てきた展覧会の内容や企画者の視点を解説しつつ、学生にも展覧会や美術館へ出来るだけ出掛けて多くの作品に接するよう促しています。また、美術史の古典的著作から近年の方法論の見直しの動向(新しい美術史)に属する著作までを講読する授業も行っており、「美術史とは何か」という問題について、学生たちとともに考えています。そして目下、「美術と無限」というテーマを設定し、その事例研究としてコンスタンティン・ブランクーシの彫刻(無限柱)をめぐる無限観念の生成と変化について研究しています。講義と研究、そして現場での実践をうまく連動させ、自分の著作を出版するのが現在の夢です。

最終講義のお知らせ

近藤喬一教授、松尾善弘教授の最終講義が、左記の日程で行われます。卒業生の方々も、どうぞご来聴下さい。

○近藤喬一教授

演題 「中国の古鏡について」
日時 平成十五年三月一日(土)
十四時より
場所 山口大学大会館

○松尾善弘教授

演題 「漢字・漢語・漢文学の件急と教育を省みて」
日時 平成十五年二月八日(土)
十四時より
場所 山口大学大会館

平成十四年度

山口大学人文学部生涯学習事業

私たちが山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の豊かな教養の保持と知的向上のために、今年度、次のような様々な事業を行ってまいりました。

(1) 第十五回公開講演

メインテーマ アジアの言語と言語学

とき 平成十四年十月十九日(土)

ところ ルネッサなごと(長門市)

講師・演題 和田 学講師 『日本語と韓国語』

平野尊識教授 『タガログ語(フィリピン)、インドネシア語と言語学』

* 年一回、山口県下において本学部の二人の教官がひとつのテーマのもとに三時間程度の講演会を行っています。県下各地に参りますのでご要望がありましたらお申し出下さい。

(2) やまぐちサタデー・カレッジ(公開講座)

会場 山口大学人文学部

前期(五～七月)

近藤喬一教授 異文化交流コース 『古代中国散歩』

宮原一成助教授 外国語学習コース(英語) 『短編小説で英語と異文化を』

山本真弓助教授 現代文化コース 『エスペラントの文化と思想』

後期(十～十二月)

添田建治郎教授 日本文化コース 『あなたの言葉にわたしのことを見つめる』

田中誠二教授 やまぐち学コース 『近世の山口』

下寄正利助教授 外国語学習コース(ドイツ語) 『グリム童話を最終版と初版で読む』

* 昨年恒例となりました大学キャンパスにおける公開講座「土曜大学」です。今年度はすべてのコースとも八回の講義で、社会人、大学生、高校生が一緒に楽しく学んでおります。来年度も開講の予定ですので、ご希望の方は受講のご案内のパンフをお送りします。

(3) 出前講義

人文学部は、幅広い年齢層の知的探究心に応えて「必要なとき、いつでも学べる」場となることを目指して、本学部教官が気軽に大学の外に出向いて講義する「出前講義」を行っております。今年度も、山口県下を始め、福岡県や広島県の地方公共団体や高校に出かけて講義を行ってまいりました。教官の講義できる領域などを掲載した冊子を用意しておりますので、気軽にお申し出くださるようお願い致します。

(4) 徳山サテライトカレッジ

五～八月(七回)

高橋征仁助教授/辻正二教授/湯川洋司教授/坪郷英彦教授/瀬藤厚教授/横田尚俊助教授 『現代やまぐち社会論』

八月(一回) 山本真弓助教授 『いろんな言葉、いろんな名前―世界を文化について学ぼう―』(キッズ講座)

十～一月(十回) 松尾善弘教授 『漢詩にアタック!』

* 徳山市や他の高等教育機関と連携した徳山駅ビル市民交流センターにおける講座です。徳山市が発行する募集をご覧ください。

(5) 徳山オーブンカレッジ

七～八月(四回)

添田建治郎教授 『かけがえない日本語』

九月(四回) 坪郷英彦教授 『モダンデザインが残したもの』

* 徳山市生涯学習センター主催の生涯学習講座です。徳山市が発行する募集をご覧ください。

平成十三年度
人文学部卒業生・
大学院修了生進路状況

人文社会学科

- 農 業
- (有)ログ企画
- 建設業
- 一条工務店、ミサワホーム中国
- 製造業
- (株)ポイント、アロー印刷(株)、中央出版、
- (株)ジャストミートコーポレーション
- 2名、中国新聞社、岡墨光堂
- 運輸・通信業
- 第一交通産業、日本トランスシティ、
- オーネスト、ユニシステム、横河テク
- ノシステム
- 卸売・小売業
- 松下ロジステイクス、極東ファディ、
- 小田徳、三知、山口リコー、山口トヨ
- ベッ
- 金融・保険業
- 日本生命・小倉ターミナルビル

サービス業

(株)物語コーポレーション、サンデーサン、五味八珍、ホテルグリーンプラザ、大成社、(株)大栄総合教育システム、徳進塾、ハイウエー交流センター、ヤマシタコーポレーション、愛グループ、財団法人競艇情報化センター、下松ケールテレビ、NOVA

教員

誠恵高等学校

公務員

広島労働基準局、国土交通商四国地方整備局、山口市役所、諫早市立図書館、広島県警察本部、相知町役場、長崎県警、小野田市役所、山口県職員2名、油谷青年の家、長崎県教育長学芸文化課、長崎市役所

進学

山口大学6名、九州大学2名、京都大学、広島大学、山口大学理学部3年次編入、山口大学研究生、科目等履修生計13名

言語文化学科

建設業

バナホーム備後、シノハラ建設システム

製造業

日本マクドナルド、ジャストミートコーポレーション2名、大村印刷、(株)富士薬品、エフピコ、唐津バルブ、(株)ヤナギヤ、東京エレクトロン九州

運輸・通信業

日本タイムシエア、ジェイ・クリエーション、ゼットシステム

卸売・小売業

カツヤ、オリエント貿易、(株)ヤノメガネ、(株)アステムフォレスト、アルピオン、ティーツー、明屋書店、ミスターマックス、九九プラス、山口トヨペット(株)、ジュエリーマキ

金融・保険業

西京銀行、第一生命相互会社、朝日ユニバーサル貿易(株)、レオパレス21

サービス業

サンデーサン、ジョイフル、福岡シテイククラブ、ELBEC教育図書センター、愛媛医療生活共同組合、梅田クリン工業、JA周南、JA別府市、大隅、山口中央農業共同組合、(株)中国警備保障、芳賀、ピーマインド、(株)毛髪クリニック リープ21

教員

大村工業高校、大分県立森高校、長崎県立平戸高校、松江市立女子高等学校、都井中学校

公務員

山口大学2名、郵政事務(A)、郵政事業庁、郵政(外務職)、山口県警2名、山口県職員、秋芳町役場

その他

NGOネバールの子供を育てる会

進学

山口大学大学院、広島大学、大阪大学、一橋大学、山口大学科目等履修生計5名

大学院人文科学研究科

豊浦高等学校、日本海新聞、蒲郡市教育委員会

入学年度別学生数

(平成14年11月1日現在)

		性別	14	13	12	11	10	9	8	7	計
人文学部	人文社会科学	男	37	42	45	45	18	4	2	0	193
		女	67	59	68	53	3	2	1	0	253
		計	104	101	113	98	21	6	3	0	446
	言語文化学科	男	20	22	22	32	11	2	2	0	111
		女	77	77	82	71	7	1	0	1	316
		計	97	99	104	103	18	3	2	1	427
合計	男	57	64	67	77	29	6	4	0	304	
	女	144	136	150	124	10	3	1	1	569	
	計	201	200	217	201	39	9	5	1	873	
人文科学研究科	地域文化学科	男	7	3	1	1					12
		女	1	5	3	0					9
		計	8	8	4	1					21
	言語文化学科	男	1	3	1	0					5
		女	3	6	0	0					9
		計	4	9	1	0					14
合計	男	8	6	2	1					17	
	女	4	11	3	0					18	
	計	12	17	5	1					35	

転居先不明者一覽表

編 集 後 記

会報は年内にと思いながら、いつも歳を越してしまいます。昨年は、真紀子VS宗男に始まり、サッカーW杯、北朝鮮問題などいろんなことがありましたが、今年も、経済問題やアメリカVSイラクの国際情勢など、大混乱の年の予感がします。そして、大学にとっても04年4月からの独立行政法人化への準備など、歴史に残る慌ただしい年になりそうです。皆様にとって、同窓会が、そしてこの会報が「癒し系」のひとつになりますようお願いいたします。今年もよろしく願います。

(OK)